

2. フィンランドでの文化視察 9/8 (木) ~ 9 (金)



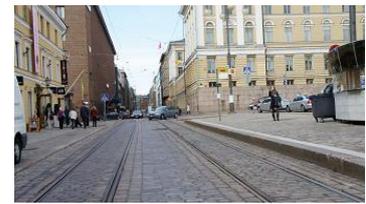
シリアラインに乗船し、バルト海クルーズ



ストックホルムよりヘルシンキへ船の旅



シリアラインでバルト海クルーズ。北欧の文化を感じる旅だった。ストックホルム、ヘルシンキの街を歩き、石畳は、歴史はあるが、点字版もなく、信号は速く変わり、車椅子、歩行不安定な社会的弱者にとっては、生活しにくい街だ。バリアフリーについて、この国々ではどうなっているのだろうか。



ヘルシンキの街の石畳

3. スイス視察 9/10 (土) ~ 12 (月)

(1) 文化視察 ルツェルン

歴史と文化に富んだルツェルンの街。自分の足で歩いた分、街の様子が理解できた。

ロイス川に架かる屋根付木橋は、流れる水も美しく、木橋に飾られた花が川に映し出され、この橋が14世紀に城砦の一部として、建造され、八角形の見張り塔とともにルツェルンのシンボル。



カペル橋



市場

ベルン

世界遺産の旧市街、牢獄等、時計台、そして、若かりし頃暮らしていたアインシュタインの家。昼間の太陽のキラキラとした紫外線の厳しさ、異常な気候と聞き、この時期としては、非常に熱く真夏のようなであった。日本を出発する前にオリエンテーションで聞いた気候と少々戸惑いを覚えつつ、鉄道と自らの足を使った、スイスでの文化視察を行うガイドの説明に大きくなづいていた。ベルン市内のコープで買ったサンドイッチや和風のノリ巻きなどを持って、世界遺産の街並みが見渡せる18,000本のバラが咲き誇る公園へ向かった。

ベルンの街を遠望し、この街がUの字に湾曲するアーレ川の城壁に守られた街である事、歴史を感じる事ができた。高台の公園はバラが美しく、各自、コープで値段を確かめながら買った昼食、ビール、ワイン、ジュース、水を並べ、急な坂道を登りきった後だったので、喉越しは最高だった。



世界遺産遠望



ベルンの街頭で



ベルンの街、

ゴルナーグラード展望台 3130mからのマッターホルン遠望

♪目の前のマッターホルン・・・♪ 吉田拓郎の歌にあるが、まさに、その歌詞通り。目の前の氷河から氷河が溶けていく変化の速さに、地球温暖化の危険性を感じることができた。



赤く染まる朝焼けのマッターホルン



ゴルナーグラードへ向かう登山電車



展望台 3 1 3 0m



地球温暖化の影響で氷河が溶けている



逆さまマッターホルン

ゴルナーグラード頂上駅から少しの時間ではあったが、軽いトレッキングを行った。一般のルートとは違う道を歩き温暖化の影響で変わりゆく氷河を見の前で見ることができた。ヨーロッパ、北欧が危機感を切実に感じている温暖化、オゾン層破壊による紫外線、日本に住んでいると理解できていなかったことが多くある事に気がついた。バルト海クルーズを体験したが、バルト海だって真水に近くなりつつあると聞いた。

宿泊したツェルマットは、標高1620メートルに位置し、名峰マッターホルンの拠点として有名な村でした。環境に配慮して、ガソリン車の乗り入れを禁止、静かで美しい佇まいだった。ゴルナーグラード頂上駅まで登山電車が一気に上がり、4000メートル級のスイスアルプスが広がっていた。

滞在は3日間だったが、奇跡的に天候に恵まれ、ホテルのバルコニーからマッターホルンがずっと美しい雄姿を見せてくれた。

財団法人社会福祉振興・試験センター
平成23年度社会福祉施設管理者海外研修・調査

レポート1では、

ストックホルム市に到着後、近郊のシグチュナー市役所では行政機関から説明を聞き、その後、アーリングヘム（特養ホーム）見学と施設理事長との意見交換を行なった。

ソデクソ補助器具センターを訪問し、介護機器の説明を聞き、知的障害者授産施設・グラサ・ダード・ゴンゲンが経営しているレストランで昼食。このレストランは、世界で初めての取り組みだという事で、食事の味は美味しいと思った。

“ガーデン オブ ザ センシス” 高齢者・障害者向け公園ということで、水の流れ、花の香り、樹木の風に揺れる音、光と影 人間の五感を快適にするような取り組みだった。そこで働く障害者の姿が印象的だった。